望まぬ転生をした男

トライツェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
望まぬ転生をした男

【Ｎコード】
Ｎ３０９８Ｌ

【作者名】
トライツェ

【あらすじ】
主人公、都塚俊彦は部活からの帰りにバンにはねられ死亡した。その後、死後の世界へ連れていかれて、自身の行く末を決めるのはダーツ！？
望まぬ転生をさせられた少年がのんびりだらだら転生先の世界で過ごしていこうとするも、周りの人間に小さな勘違いから巻き込まれていく話です。
＊この作品はオリ主チート最強です。原作の人物は最初ほとんど出てきません。原作ブレイクがあります。ご都合主義です。この作品

は作者の処女作なのでいろいろと矛盾があるかもしれません，
大戦が始まるまでかなり飛び飛びしながら書いていきます。また戦
闘シーンも大戦が始まるまでほとんどありません

プロローグ

プロローグ

「次の方ダーツを投げてください」

「よっしゃぁ！絶対転生に当ててやる」

俺の目の前にいる天使が俺の前にいた男に対してダーツを投げるように言っている。それに対して男は気合を入れて２ｍ少々離れた所からダーツを投げようとしている

ふぅ。とりあえず今の状況を確認してみよう。俺の名前は都塚俊彦（とつかとしひこ）、ついこの間（といっても7月３０日だが）１８歳になったばかり。趣味は読書をすることおよび興味を持ったことに関して無差別に調べること。そしてなぜここにいるかというと……ああそうだ、俺は部活の帰りにちょうど交差点を渡ろうとして信号が赤になったから諦めた。

そして、信号が変わるまで時間があるから今日友人から借りたマンガを読もうとしてカバンを開けて取り出そうとした時に後ろから走ってきた会社員にぶつかられて体勢を崩して……走ってきたワゴン車が頭にぶつかったはず。

……なんというか不幸がここに極まった感じだな。まぁ二次創作でもよく言われている転生トラックに轢かれなかっただけでも良しとしよう。強制的に転生オリ主のようにチート技能を持って異世界を旅するなんて御免だ。

「残念ながら地獄行きです」

「ちょっ……嫌だ！地獄には行きたくねぇ！」

「残念ながら規則なので。それにもう御向いの鬼は来てますよ」
男の喚く声に対して顔をあげてみると天使が指差した先にはには体長が２ｍほどの鬼が２体立っていた。先ほどダーツを投げた男は鬼のほうに走っていき縋りついて頼みこもうとしたが
「はぁ。また、嫌がってるやつかいな」
「頼む！俺は……ぐふぉ」
鬼はため息をつきながら縋りつこうとした男の鳩尾に拳を叩き込んで強制的に黙らせた。
「と、このように決定に逆らう場合なりますので注意してください」
にっこりと笑いながら天使がこっちを見てくるがさっきの光景を見た後ではどう考えても脅迫にしか思えない。実際、俺の後ろに並んでいた奴らも顔を真っ青にしながらうなずいているし。
「さてと、次の方は……都塚俊彦さん」
「はいっと」
「それではダーツを投げてください。転生できるといいですね」
微笑みながらダーツを渡されるが転生するのはかなり難しいだろう。何故なら的であるダーツボードは回転している上に、天国、地獄、転生の割合が２：７：１とどう考えても狂った（ある意味正しい）配分だからである。

どう考えても無理ゲーに分類されるだろうこのダーツで転生をすることは……。
まぁ元々の目的は転生することではないから逆に歓迎すべきことだろうな俺にとってこの比率は。
考える時間ももったいないしそろそろ投げるか。
右手の人差し指と中指で挟みながら手首のスナップだけで投げたダーツは吸い込まれるように地獄と地獄の狭間にあった

……転生に刺さった。

ざわ…ざわ…
後ろで他の奴らがざわついているが俺は目の前にある結果に愕然としている。

「っちょ…マジかよこれ！？」

「おめでとうございます！このダーツ始まって以来３０人目の転生者です！ではこの通路の先にある部屋へ行ってください」

「……分かりました」

　このまま文句を言ったところでさっきの男のように殴られて強制連行されるだけだろうし無理矢理されるくらいなら自分で向かった方が諦めもつくな…はぁ。

「珍しいですね、この部屋に来る人は。転生、おめでとうございます」

目の前にいる天使（便宜上、天使Ｂとする）は軽く眼を見開くことで驚きを表した。
今の俺にとってはチート技能が付けられてしまうのかどうかが問題なんだが。

「ところで、転生するにはどうしたらいいんですか？」

とりあえず疑問に思っていることを聞いてみる。まぁ、テンプレ通りに５つの～なんて言うんだろうな。

「性別、身長、体重に関してはそちらに選択権があります。が、それ以外に関しては再びダーツで決めていただきます」

……は？ちょっと待て今目の前の天使Ｂはなんて言った？性別、身長、体重以外は又ダーツだと！？

「という事は、チート無しで過ごすこともできるんですか！？」

「ええ。といってもダーツの結果次第ですが」

よし。これで俺の時代が来た。さっきは予期せぬ転生で参ったが、いまでは感謝しよう。これでチート技能なしで生きることができる未来が手に入ったんだから！

「では、こちらへ」
天使Ｂに連れて行かれたのは、先ほどと同じようにダーツボードが置かれた広間だ。
「能力決定のために今から、ダーツを二回投げてもらいます。」
天使が指をパチッと鳴らすと真っ白だったダーツボードの上に『破壊』やら『再生』といった文字が浮かび上がってきた。おそらくあれがさっき言っていた能力だろう。まぁ、これについてはどれにあたろうとも諦めよう。その後が大切なんだから。
「では、投げてください」
俺にダーツを渡しながら天使Ｂは言ってきたから俺は迷わず投げダーツは…『腐敗』と書かれた所に当たった。
「……は？」
いや待て待て、今のは俺の幻覚だ。あり得ない場所に当たったに違いない。今に天使がそれ以外の能力を言ってくれるはずだ！
「おめでとうございます。あなたの一つ目の能力は『腐敗』に決定しました。次に……」
俺を軽く地獄へと突き落とす言葉を発した天使Ｂの声を聞きながらそれ以降俺は自失呆然としながら言われるがままにダーツを投げ続けた……
時折、
「属性は『霧』です」

やら

「武器は……『ＲＥＢＯＯＮ』の匣(ボックス)兵器を三つと属性に対応した指(リング)輪ですね」

などと聞こえていたが平穏無事な生活を望む俺としては、最初に手に入れた能力があまりにも酷すぎて碌に聞いていなかった。

それが、この後に最大級の爆弾になると知らずに……

「では最後にあなたの行く世界を決めさせていただきますのでダーツを投げてください」

ふふふ…もう終わってもいいよねパト◯ッシュ。もう疲れたよ……。

「投げないのであれば、あなたの能力にふさわしい世界に決定させていただきますが？」

「すぐに投げますからそれだけはやめてください！」

今、俺が手に入れた最初に手に入れた能力ではどう考えても碌な世界に転生させてもらえるわけがない。ここは、運に任せよう。戦闘がない世界に転生できるように。

「では投げてください」

天使Ｂに言われ、精神集中しながら手首のスナップを利かせながらダーツを投げた。
俺の手から離れたダーツはヒュッという風切り音を上げながら……魔法先生ネギま！と書かれた所に当たった。

「……はは。ついに天は俺に味方した！ありがとう神様、俺を争いと無縁の世界に連れて行ってくれて！」

あのマンガは一応１巻だけだが読んだことがあるからな。内容はラブコメだから戦闘とは無縁でいられる。魔法使いのいるウェールズと舞台である麻帆良だけを避ければ平穏無事な人生を過ごすことができるんだ！

「では、あなたの得た能力などをもう一度確認のために言います」

今の俺は最高にテンションが高いからどんな理不尽にも対応できる…はずだ

「まず能力は『腐敗』と『幻覚』
属性は『霧』
髪はアッシュブラウン、瞳の色は黒
年齢は２３歳
転生は原作２００年前
氣の量と魔力量は平均的な魔法使い１００人分
武器に関しては霧のリングが１つ及び匣が３個
特性として『不老不死』『似非外国人』『ロリコン』
が付与されました」

……ちょっと待て。今聞き捨てならない特性が付いていたのは気のせいか？

「なぁ、今、特性のところで『ロリコン』て聞こえたんだが冗談だよな？」
冗談だと言ってくれ！！
「残念ながら事実です。武器の取り扱い及び特性、能力に関しての情報はズボンのポケットに入れておきますので、転生後に見てください。それではよい転生後の人生を」
「ま…待て…」
すべてを言いきらないうちに俺の意識は徐々に暗闇に包まれていった。

その1（前書き）

スイマセン！今回は主人公の能力などの説明だけで終わってしまいます

物語は次から始まるので頑張って早く投稿したいと思います

その1

Ｓｉｄｅ都塚

闇に沈んでいった俺の意識は徐々に浮上していき覚醒した。

「……っツ。ここは何処デスカ？」

……ちょっと待て。今、きちんと発音したよな！？何で片言になってるんだ！？……まて今のはさっきまでの混乱が続いているだけで聞き違えただけだ。さぁ気を取り直して

「ここは何処デス…カ」

やっぱり俺の声だぁぁぁ！？何で発音が片言になってるの！？

「……現実逃避は此処までにしておきまショウ」

とりあえず俺の武器や特性に関して書いた紙がポケットに入ってるんだよな。えーと何処に…っと見つけた

ズボンのポケットに入ってるとはなかなかに親切だな。

えーと何々、『あなたの周囲に落ちているズダ袋に武器が入っています』っと。

ん。これのことか。とりあえず野党の類に奪われなくて済んでよか

ったな。

次は『もし、武器が奪われて1週間以内に取り返せなかった場合あなたは死にます』って何だと！？
アブね～もし盗まれていたら一週間後に死んでいたのかよ。
まぁ、結果的に奪われていなかったからよしとしよう。

お次は『中に霧のリングと匣(ボックス)が3つ入っています』ってこれか。

んで、『霧のリングに死ぬ気の炎をともすのには覚悟が試されます。また、炎は気を使用しますので注意してください。もし気が無くなると死亡します。ちなみに霧のリングは原型のボンゴレリングです』

ちょ…おま…原型のボンゴレリングって。まぁ確かにボンゴレリング自体が世界を創造した原石の欠片だから確かに盗まれるわけにはいかないよな。とりあえず炎の出し方は原作を読んでるから知っているけどまぁ試してみるか。リングを中指につけてと。俺の覚悟は……

『この世界で何があっても生き抜いていく覚悟』だ！

ボゥと音がして俺のリングに藍色の炎がともったから成功だな。
まぁかなり小さいが…うん。これはゆっくりと強化していけばいい

ことだしな。ところで匣には何が入ってんだ？そっちの方が気になるんだが…。

『匣は死ぬ気の炎をともした指輪を匣にあるくぼみに押しつけることで開匣出来ます。
また匣には霧烏（クォーボ・ディ・ネッビストン・ネッビオーサ）、霧の杖、霧の籠手が封入されています。霧烏は形態変化（ピオ・フォルマ）し、霧の杖と合体することで『射殺す百頭（ナインライブス）』になります』
キタコレ！と喜ぶのが普通なんだけど、今の俺の炎じゃ十中八九開匣できないから飛ばすか。というよりも、『射殺す百頭』って何だ？

『次に特性について説明します。まず『似非外国人』についてですがこれは、話す言語がすべて片言になってしまいます。その代わり、すべての言語を話す、書く、読むことができます』
……なんだろこれ。全ての言語が片言になるって、メリットのほとんどが消されている気が……もういいや次に行こう。

『『ロリコン』についてですがこれは目の前にいる少女がいる場合、無意識的に目で追ったり助けるようになってしまいますが襲いかかったりはしませんので安心してください。
また、限界を超えた能力を発揮することも出来ます』

もう死にたい。何これ……転生初っ端からこんな思い制約を背負って生きて行けと！？
……少女に襲いかからないというだけでもマシだと思っておこう。
じゃないと精神の安定が図れない。

『最後に『不老不死』は文字通りです。ですがそちらの世界では不老不死の存在は真っ先に討伐される対象となっているので注意してください』

……あれ？ここってラブコメの世界だよね？なんで討伐なんて言う物騒な言葉が出てくるんだろう……

「……これまでの話を纏めると私は片言の外国語を話す怪しい人物の上に少女がいたら目で追いかける変態デス。そして極め付けに討伐対象である不死者……死にたいデス」

けれど俺の特性に『不老不死』があるからどうやっても死なないし、その上老けないから長いこと同じ町にいられないという制限。何だろう、転生したメリットのゲージがマイナスの方向に振り切ってしまったよ！？

もぉいいや、辺りもそろそろ暗くなってきたし能力だけ見てもう寝よう。

『能力に関してですが、まず『幻術』は、あなたの属性である『霧』と相乗効果を生み出し少量の死ぬ気の炎で高精度の幻術が使えます。具体的にいえば、ライターほどの大きさの炎が起こせればそちらの最高位の魔法使いですら見破ることができません』

……つまり幻術をうまく使えば不老不死者であることが隠せると！よし、何とか希望が出てきたぞ！

『次に『腐敗』ですが、これはあなたが腐敗させたいと思ったものに手を触れると有機物無機物関係なく腐敗させる能力です。また、あなたが強くなればなるほど、その効果範囲が広くなります。ちなみにズダ袋の中は一種の四次元空間なのでいくらでも物が入りますので有効活用してください。
注意1，中の時は止まっています。
2，取り出したいものがあるときは念じて取り出してください
3，生きているものは入れられません。
特典として、寝袋と毛布、一月分の食料を入れておきます』

『腐敗』の能力がとんでもなく恐ろしいものだという事が再確認できたな。……対人戦闘では使わないようにしよう。じゃないと阿鼻叫喚の地獄が目の前に展開される。
っとあれ？まだ続きがあるぞ…え～と

『最後に書きますがあなたの能力である『腐敗』の為、そちらの魔法はいくつかを除き一切使用することができません。また使える魔法も反動が強すぎて危険すぎるものが多いです。
それではよい転生後の人生を……』

まぁ元から魔法自体使う気がなかったからこの程度のデメリットはなきに等しいんだけどな。つーかさっきまでのデメリットの方が

酷過ぎて全く残念に思わない。
最初に覚悟した『この世界で何があっても生きていく』がもう無理になりそうだけれどここで諦めたら、幻術の精度が落ちるから……あ～もう難しく考えるのはやめだ！
今日はもう寝る！これからのことは明日考える！どうせ今考えたところで堂々巡りだしな。

その2

Ｓｉｄｅ都塚

ふぁ～あ、おっ今日は晴……ってチョット待て俺は馬鹿か！？こんな荒野のど真ん中で焚火も焚かずに寝るなんて自殺行為以外のなにものでもないぞ！？……いやむしろ俺は『不老不死』だから自傷行為か…まぁどっちでも変わらんな。
まぁ気を取り直して朝食でも取るか。基本的に朝はほとんど食べないから果物で十分。
とりあえずズダ袋に右手を突っ込んで……リンゴよ出てこい！
うん、ズシッていう重さが右手にしたから成功だな。

俺は右手をリンゴを掴みながら引き出した。

ん。新鮮そうなリンゴだからおいしそうだな。んじゃぁいただきますっと

ガブッと噛り付いてみたが見た目通り新鮮で中から果汁があふれ出してきた。
「本当に新鮮ナ林檎デスネ」
やっぱり自分の言葉が片言ってのは変だな。どうせ一年もしたら慣れてしまうんだろうけど。
よしリンゴも食べ終わったし、芯はここに埋めておいて、種はそこらへんに捨ててておくか。
今、埋めた芯と種が将来ここに果樹園を作ったりしてな……はぁ馬

鹿な妄想もここまでにして今日の指針を考えるか。
まず今日の目標は町を見つける、そしてあわよくば町に行くだな。
高台の上からのほうが町も見つけやすいだろうから……ここらへんで高台になりそうなのはあそこにある大岩だな。
……今、首を絞められた鶏が出すような甲高い声がしたんだが…うん気のせいということにしておこう、主に俺の精神安定のために。

Ｓｉｄｅアリア
あ～もう本当についてないわね！なんで低級妖魔の退治の依頼でグリフォンなんていう大物と戦り合わなくちゃいけないの！？今回、保険のつもりで持ってきた魔法薬も一瓶しか無いしどうしろって言うのよ！それに今の時期、グリフォンは西の森で繁殖の最中でしょ！？
こうなったら、絶対に生きて帰って事前調査の不備を楯に交渉して報奨金の割り増しを認めさせてやるわ！

「クラウ・クラック・クリティウス！風の精霊７８人　縛鎖となりて　敵を捕まえろ　魔法の射手・戒めの風矢！！」

どうよ！なけなしの魔力と保険に持ってきていた魔法薬を利用した戒めの風矢は。これなら、いくらグリフォンでもしばらくは動けないハズ…だったんだけどねぇぇぇ！！！
さっきの戒めの風矢で残っていた魔力の７割を使ったから……飛行魔法の分を除けば魔法の射手３発分ぐらいね残りの魔力は。
ははは…ほとんど八方塞り…でも…

「こんなところで死ぬわけにはいかないのよ！

クラウ・クラック・クリティウス！光の精霊３人　集い来りて
爆発せよ！　魔法の射手・閃光の光矢！」
私の放った閃光の光矢は狙い通りにグリフォンの目の前で爆発して、
眼つぶしの役割を果たした。

しかしグリフォンが放った出鱈目なカマイタチは閃光から目を守る
ためにつぶってしまった私の……右足を切り落とした

「ッギ…アアアァァァ」

痛いイタイいたい！まるで焼きごてを押しつけられたかのような痛
みが右足に走る。
しかし、皮肉なことにこの痛みが逆に私の思考を冷静にしてくれた。
よかったグリフォンは去って行ってくれたみたいね。でもこんなと
ころを旅する人なんていないからたぶん私はここで死ぬんだろうな
…ハハッ…いま思い出すのが子供のころに読んだ絵本の内容だなん
て白馬の王子様なんていないのに…なんで……ウゥ…死にたくない。
死にたくない。死にた…く…な…

ただ一心に死の恐怖から逃げようとしていた私の意識は禍々しい暗
闇に閉ざされた

Ｓｉｄｅ都塚
今、目の前に猫耳をつけた少女が倒れています…右足がない状態で。
チートオリ主なら迷わず駆け寄って声をかけるんだろうけど、普通

の人生を歩んできた俺に…は…って俺の意思とは逆に彼女へ近づいて……っはまさかこれは特性である『ロリコン』のせいか！

つーかそれ以外に考えられんよな今の状況は。余計な思考は省いて、彼女をどうやって助けるか…の前に彼女は生きているのか調べたほうがよさそうだな。

……うん。いくら少女だとはいえ服を脱がせるのはまずいよね。いやこれはれっきとした医療行為に繋がるから問題は無い。

……よし理論武装も終ったところで少女の服を脱がせて胸元に耳をあてる。…心臓は微弱ながらも動いてるけど早く処置しなければ失血死してしまう。

どうする……そうだ、骸がクロームにやっていたように幻覚で足があると錯覚させれば……いやそこまで精密な幻覚は今の俺には作れない…だったら切り落とされた足を持ってきてつながっていると錯覚させればいい。これなら、多少精度が甘くてもどうにかなる。

なら切り落とされた足は、よし、すぐ近くにあったおかげですぐに処置を始めることができる。もし遠くに落ちてたら……余計な思考はするな彼女を助けることだけを考えろ。

彼女の右膝の切断面と切り落とされた右足の切断面をくっつけて、リングに炎をともす！

……うん。炎が出たのはいいんだけど、これは大きすぎやしないか—具体的には１ｍほど—いかんいかんまた無駄な思考をしてしまった。ここから先は一瞬の油断が命取りになりかねない。

余計な思考はするな、ただ目の前の少女の右足をつなげることだけを考えろ。

俺が想像するのは……両足で草原を走り回る少女！！

Ｓｉｄｅアリア
なんだか体がポカポカして暖かい。
まるで春の日だまりで昼寝をしているようだ。
別にいいよね。もう少し寝ても。これまでずっと頑張ってきたんだから、少しくらい休んでも……

少女は覚醒しかけた意識を再び暗闇に沈めた。
しかし、暗闇は先ほどのように禍々しくなく、むしろ星の出てない夜空のように澄み切った暗闇だった

その3

Ｓｉｄｅ都塚

少女の足を繋げてから2時間ほど経った。

ふう……何とか足を繋げることができたが恐ろしい速度で気が消費されていくな。これじゃあ明日の朝には気が枯渇しかねない。

……どう考えても『ロリコン』が発動した時の俺は普段以上の力いわゆる『火事場の馬鹿力』が発動しやすいんだよな。それに口調なんかも微妙に変わるし。けど、限界以上の行動を続けると普通は体が持たない。しかし、『不老不死』の特性を持つ俺はその無茶を続けることができる。

自身が『不老不死』になったことを喜べばいいのかわからん。とりあえず『ロリコン』という特性で死ぬことを免れることができたのは喜ぶべきなんだろうが、この世界では『不老不死』である俺は第1級討滅対象……やばいあまりメリットがない。しかも、普通の人にとって『不老不死』は永遠に追い求める事だからもし俺の特性がバレたら……実験動物（モルモット）確定だ…何とかバレ無いようにしなければ！

「ア…レ。私、生きてる？」

！もう少し起きるのは後だと思っていたんだが、まぁいいかこれで予定よりも早く町につけるかもしれないな。

Ｓｉｄｅアリア

暗闇の中に沈んで行った私の意識は再び浮上していき、まぶしい日の光が目に突き刺さった。

そして疑問に思う。いまだに右足はグリフォンに斬られた時よりもはるかに弱い痛みであるがそれを訴えてきているのに、右足が繋がっている。
しかし私の口から洩れた感想は右足が繋がっているものではなく

「ア…レ。私、生きてる？」

そう、私が生きていることだ。そしてグリフォンによって足が斬られて失血と疲れによりすぐに意識を失ったのに今の私は魔力量を除けば平常時とほとんど変わらないことに気づいて驚きの声を上げようとしたら

「ふむ。幻術は問題なく発動しているようデス」

と、私の右側から聞こえてきた。慌てて振り向こうとすると

「急に動かないほうがいいデス。私もこの方法で治療するのが初めてなノデ」

肩を抑えられて振り向くことができなかった。でも、私を治療してくれたと思われる人は目の前にきてくれた。
第一印象はちょっといいかな位だった。だって、目の前の男の人は肩辺りまで無造作に伸ばした髪を後ろで纏めていただけだし、顔にしても十人並み位だった。
とりあえず疑問に思っていることを聞いてみることにしよう。

「あの…あなたが私を治療してくれたんですか？」

……あ。そういえばさっき目の前の人が自分が治療したって言ってたっけ。

あ～まだ気が動転してるのかな。同じことを二回も聞いてしまうなんて。でも帰ってきた答えはこちらの予想していたものとはかなり違っていた。なぜなら

「治療したというのは正しくもあり間違っているのデス。実際には私が幻術で現実を騙して貴女の足が繋がっているように錯覚させているだけデス」

　というようなまず普通の魔法使いが聞いたら耳を疑うような内容を平然と言ったからである。
確かに、幻術で現実を騙すこともできる。しかし、今、自分に起こっていることを行うには幻術に特化した魔法使いが何十年も修行してやっとたどり着ける境地でもあるからだ。
それほどの秘術といってもおかしくないものを目の前の男性はあっさりと言ってのけたのだから。
はっきり言うと、私は目の前の男性に感謝よりも恐怖した。だって、今にも死にそうな亜人である私を治療して生かしておくなんてどう考えても、最悪の事態しか想定できない。しかも生殺与奪権を握られているからだ。しかし私が警戒の意識を男性に向けるとさも心外そうに

「ふむ。私は貴女の体目当てに助けたのではありません。私が貴女を助けたのは町への道を教えてもらいたかったからデス」
と言った。

　つまり、この人は道に迷ったから、町までの道を知ってそうな私を助けたってことか？
……うん。私の体目当てでないことには安心した。けれどなんだろうこの胸のモヤモヤ感は……
とりあえず

「私が町まで案内すればいいんですね」
「ハイ。近くの町までお願いしマス」
そう言い終えると男性は私のほうに背を向けしゃがみこんできた。
「えーと。どうしたんですか？」
「貴女、町まで歩くつもりだったんデスカ？右足は繋がっていますが無理な負担を掛けないことに越したことは無いのデス」
今の話を纏めると……
「つまり、私をおぶって町まで行くと？」
「それ以外の方法で連れて行きマショウカ？例えば、お姫様だっこトカ」
「おんぶでお願いします！」
さすがに15歳にもなってお姫様だっこは遠慮したいです。
「では乗ってくだサイ」
私は、男性の背中におぶさった
Ｓｉｄｅ都塚
……さっきから背中に弾力のある二つの塊が当たって顔が赤くな

っているのが自分でもわかる。
どうしよう…このままじゃ恥ずかしすぎる。
どうすればいい！どうする！？
ここで俺がとった行動は

「そういえば、お互い自己紹介がまだでしたネ。私は都塚俊彦と言いマス」

俺は無難な選択をして、気恥ずかしさを紛らわせることにした。

「私はアリア＝ローレストと言います」

少女―アリア―は自己紹介に対してきちんと返してくれたことに安堵した。
しかし続く質問には、少し詰まってしまった。

「ところであなたは何者ですか？あなたから悪魔などに近い匂いがします。それに、あなたの使っている幻覚はなんですか？魔力を感じないのですが？」

「……前者はノーコメントということデ。後者に関してはうちの家系にだけ出現する能力デス」

「……もう一ついいですか」

「何デスカ」

「なんで片言で話すんですか？」

「……うちの家系で能力が発現したら勝手になってしまうのデス」

「嘘ですね」

「騙されておいてもらうと嬉しいのデスガ……」

そんなこんなで俺とアリアはお互いに質問をしあいながら町へ向かっていった。

アリアを背負って走ること三時間程でぽつぽつと建物の影が見え始めていた。
しかし、人を一人背負ってかなりの距離を走ったのに疲れないとは身体強化の魔法は馬鹿に出来ないな。
俺は、初め身体強化の魔法を使用せず走り続けていたんだが、だんだんと汗だくになっていく俺に気づいたアリアが

「俊彦って、身体強化の魔法知ってる？」

と質問されたので知らないと答えたら、ため息をついて、身体強化の基本魔法である『戦いの歌』の呪文を教えてくれた。
　そして魔法を初めて使った俺は『戦いの歌』を魔力任せに使い続けてここまで来た。
……よく途中で魔力が切れなかったよな。これからは、『戦いの歌』も幻術の修行と並行して行おう。
うまく使えば、戦わずに逃げることもできるだろうしな！
これからの指針を立てた俺は町の入り口に着いた。

「さて…病院はどこデスカ？早く貴女の足を繋げ治した方がいいのデスガ」

「病院？……ああ治療院のこと。治療院はこの大通りをまっすぐ行って二つ目の路地を左に曲がったらすぐだよ」

二つ目の路地を左っと。おおあったあった。なんていうかエジプトにある四角い家を思い出すな。まぁ住んだことは無いんだけど。治療院にライラを預けたら、宿をとって修行だな。

「スミマセン。一人治療していただきたいのデスガ」

「えーと、治療してもらいたいのはどっちだい」

俺は治療院に入ってカウンターに座っていた、大きな角を持った女性―後から知ったことだがヘラス族と言うらしい―が訪ねてきたまぁ、どっちも怪我をしているように見えないからなぁ

「背負っている女性デス。右足を繋げていただきたいのデスガ」

「はぁ！？繋げるも何もその譲ちゃんの右足はきちんとついているじゃないか！」

「今は私の幻術でそう見えているだけデス。実際には離れていマス。早くしないと私の幻術が持たなくなってきているのデス！」

実際、死ぬ気の炎に関してはまだ余裕が残っているんだが、俺もここまで鮮明に彼女が両足で草原を走り回っている姿を想像し続けているため集中力が限界にきかけている。

「だったらその幻術を解きな。それで、右足が離れたら信じてやるよ。侘びとして治療費もタダにしてやるよ！」

「わかりました……解！」

「ギッ……」

俺が脳内で再生し続けてたアリアの姿を消すと同時にアリアの右足から徐々に出血が始まり、歯を食いしばりながら痛みに耐えている。

「っあんた本当のことを言ってたのかい！？早く奥の治療室へ！」

そのままアリアは、ストレッチャーに乗せられ奥の治療室へと連れていかれた。

んじゃま、やるべきことも終ったし宿でも探すか…って俺この世界の通貨持ってねぇよ……日雇いのバイトでも探して今日も野宿、いやこのまま旅を続けて魔獣相手に特訓するのも…

とりとめのないことを考えながら俺は治療院を離れて行った。

さてやってきました、俺が最初に目覚めた場所に！町からは2時間程で着くことができたから、まだまだ早くなると思う。

……うん現実逃避をするのはもうやめよう。只今目の前には腐界といっても問題ないような光景が広がっている。

どう考えても、俺が食べたリンゴの芯と種から生まれてしまったとしか考えられないよね。だって森の入口に竜らしき存在の腐った骸が転がっているんだから。……なんで1日もたたないうちにこんな森ができてしまったのか知らないけど……ここなら外敵が来ないだ

ろうからゆっくり修行できると思っておけばいいか。そう思っておけば、俺の罪悪感が少しでも減る……はず。

こうして俺は、修行するために腐界となった森へと入って行った。

その5

Ｓｉｄｅ都塚

ん。今日もいい天気だ。これなら、今日の修行もはかどるだろ……

「う…動くな！この化け物！」

はい、現実逃避はここまでにしておいてっと。只今、俺は鎧を身にまっとった騎士たちに囲まれています。

とりあえず、今までのことを振り返ってみよう。

時間が飛んでいるからいくつか思い返すことがあるが、まず、アリアと別れてからこの腐界に１０年ほど籠って修行していたおかげで匣兵器（ボックス）がすべて使えるようになった。しかし、問題がひとつ……死ぬ気の炎と魔力の相性が悪くて同時に使用する事が不可能に近いということが修行を開始して半年で判明した。

これについては同時に使用することを完全に諦め、基礎的な体力づくりと大剣の扱い訓練する時間に回すことにした。

そのおかげで、腐界の生物と真っ向からやりあっても大剣だけで退けることができるようになった。

最初のうちは四肢をもがれて、内臓を生きたまま食われるっていうこれどこの拷問？みたいな苦痛があったが、時間がたてばたつほどその痛みが快感に変わっていって焦ったことは懐かしい

本当に現実逃避はここまでにして誤解を解くか

「私はここで静かに生活しているだけデス。何か問題でもありましたカ？」

「ッ……全員この者に対して捕縛結界を展開し抵抗できないようにしろ！」

ってちょっと待て！？全員こっちに向けて剣を向けるな危ないだろうが！

「よし、捕縛結界を展開しろ！」

団長らしき人が命令したとたん縦横無尽にまた幾重にも魔法陣が俺の体を束縛した。

マズッ！このままじゃ処刑ルートへ一直線だよな。うん、まだ死ぬわけにもいかないからここは逃げの一手を打とう。

まず結界を俺の能力で『腐敗』させる！

「だ……団長！捕縛結界が！？」

Ｓｉｄｅ騎士団団長

本来、今回の任務は１０年前に突如として荒野の真ん中に現れた森を調査するだけだった。

無論、森だといってもそこは第１級危険区域に指定されているが自分たちは思い込んでいただけだった。いざとなっても火属性の魔法があれば簡単に切り抜けることができると。

しかし、今、私の目の前にいる存在は理解することができない。

なぜこの森の中でマスクをつけることもなく平然としていられるのか！？

この森には高濃度の瘴気が漂っているためそれを遮断できる装備を身につけなければ肉体が腐ってしまうのに目の前の男は何の変哲もない服を着ているだけだ。

この瘴気の中で生身で動けるということは……目の前の男は高位の

悪魔と契約をしたのか！
ならばこの瘴気の中でも装備を付けること無く生存していることも納得できる。
　高位の悪魔と契約した男をこのまま野放しにしておくのはあまりにも危険すぎる。捕縛結界で捕まえ、確実に消滅をさせなければ。
私が捕縛魔法の使用命令する前に目の前の男が唐突に口を開いた。
「私はここで静かに生活しているだけデス。何か問題ありましたカ？」
ふざけるな！高位の悪魔と契約しておいて何が静かに生活しているだけだ！
「ッ……全員この者に対して捕縛結界を展開して抵抗できないようにしろ！」
　私の命令どおりに団員たちは剣の切っ先を目の前の男に向けた。
これに対し目の前の男はわずかに恐怖したのか後ずさった。
これならいける！私は目の前の男を捕縛できることを信じて疑わなかった。
「よし、捕縛結界を展開しろ！」
男は抵抗することなく、捕縛結界に捕まった。
おかしい、高位の悪魔と契約しているはずなのに何も行動を起こさない。何かほかに隠し玉でもある……
「だ……団長！捕縛結界が！？」
思考にふけっていた私の目の前信じられない光景が広がっていた。

なぜなら、鬼神兵クラスの存在を捕縛することのできるエメラルドグリーンの捕縛結界の魔法陣が徐々に男に触れている部分から黒く変質していき、パラパラと男の体から落ちたからだ。
ああ……目の前の存在を一言で言い表すなら先ほど団員の一人が言っていたように『化け物』とするのが最も正しいのだろうな……

Ｓｉｄｅ都塚

『腐敗』で術式の根幹を壊したんだがやっぱ驚くか。まぁこれで、騎士たちも動揺してるみたいだし逃げ易くなったしな。このチャンスを逃すわけにはいかんな。
俺は魔力を両足に集中して瞬動を利用し、騎士の頭上を飛び越えて包囲網から逃れた。
あ～この腐界は修行する土地としては一級だったんだがなぁ……へラス帝国にでも向かうか。あそこには確か龍樹とかいうかなり強い奴がいるみたいだしな。
そんな強い奴がいるなら各国に対するけん制にもなっているだろうから平和……だったらいいな。

Ｓｉｄｅ騎士団団長

私たちの目の前から男は瞬動を使って我々の前から姿を消した。
目の前から男が消えると一人また一人と構えていた剣を下していき安堵のため息をついた。
だが、私は上に報告すべきことの出鱈目さに頭を抱えたかった。
鬼神兵すら捕縛するような魔法を簡単に壊した男のことを伝えて、上司は果たして信用してくれるのかが不安だった。

だが、あの男が消えたため最初の予定通りにこの危険すぎる森を探索しなければならないことも思い出しさらに頭が痛くなった。

その６（前書き）

転生してから大体三十年ほどたったころの話です

その6

Ｓｉｄｅ都塚

俺は今、ヘラス帝国の郊外にある村にいる。

どうやら最近、帝国はメガロメセンブリア連合軍とかなりキナ臭くなっているようで、村から働き手が次々と徴兵されせいで人手が少なくなっていたため、俺は頼まれて狩りなどをしていた。

人から感謝されるってのはかなり久しぶりだな……最初の十年は腐界に引きこもって、その後の二十年はこの魔法世界を旅してまわっていたから、一つの土地にこんなにも長く居つくのも初めてだからな。

腐界での修行は今思い出しても成功と失敗が半々だったと思う。何故なら、あそこにいる生物は最弱のものでもある程度の再生能力を持っているせいでまともにやりあっても倒せない。

しかも、俺の持っているチートと言っても過言ではない『腐敗』が通じないのだからたちが悪いというより、もう絶望しかなかった。

けれどもその代償として、やつらの動きは鈍重で幻術に対する抵抗力というものも皆無だったおかげで逃げることは楽だった。

だから俺は、匣兵器（ボックス）、、魔力、気の運用について集中的に特訓した。そのおかげで、二十年の旅の中で夜盗とかに襲われたとしても相手を殺すことなく倒すことができたからありがたかった。

おそらくこの時の俺は天狗になっていたのだと思う。最初のうちは、腐界の魔獣に負けていたが今では不意打ちをされても対処できるようになっていたから、生温い現世から転生した俺が自分よりも強い

奴はいないと油断したのも当たり前だった。

そうして引き起こされたのが今、目の前で起こっている惨状だ。

俺の目の前には白髪の少年が巨大な魔法陣を背にして無表情に構えもせず立っている。
ちょうど、俺が山へ狩りにいってる間に来たらしい。
そして、巨大な魔法陣の中には俺が世話になった村人たちがピクリともせず横たわっている。

「貴方は一体何をしようとしているのデスカ」

「まだ、残っている人がいたのか。まぁ簡単な話だ、世界を元に戻すための生贄になってもらうためだよ。幸いここの村人は血が濃いからね、贄としては一級品なんだよ」

「殺したのデスカ？」

「いや、まだ儀式を始める前だからね。眠ってもらっているだけだよ」

少年は何の感情もあらわすことなくまるで人形のように淡々と説明した。
対して俺は、この少年に恐怖を抱いていた。これまで積み重ねてきた経験と本能が目の前の存在が自分よりも強いということを訴えてきたからだ。

しかし俺はその警告を無視する。自分に勝てる存在などこの世界にいるはずがないとタカを括ったからだ。

「悪いですが、その計画ここで潰させてもらいマス」

「出来ると思うのかい？」

「当然デス。私も並の死線を潜り抜けてきたわけで無いノデ」

リングに炎を灯し匣（ボックス）を開匣し、霧烏（クォーボ・デバスネンビ）、霧の杖（アビアセスタ）、霧の籠手（ネッビオーサ）がそれぞれ俺の肩、右手、両手に収まった。

「初めて見るタイプのアーティファクトだね。それに肩に乗っているカラスからはとてつもない力を感じるよ」

「そうデスカ。では始めまショウ。村の人たちを早く助けたいノデ」

俺は瞬動を行い、一瞬で相手の懐に潜り込んで杖で首を狙ったが、逆に右手だけで振るった杖と腕の間に潜り込まれて鳩尾をめがけて正拳が飛んでくる。しかし、フリーにしておいた左手で防いだが、あまりの衝撃に吹き飛ばされてしまった。

そのため、俺と相手に約５ｍほどの間合いができた。

「へぇ。今のを防ぐんだ。わざと、左腕を使わなかったのかい？」

「ええ。まぁ、私もあそこでカウンターを選んでくる人には初めて会いましたがネ。あなたを見た目で侮っていると痛い目を見そうデス」

「ふうん。何か手でもあるのかい？」

「これを対人戦で使うのは久しぶりなのデス。ヤタ、形態変化（カンビオ・フォルマ）“大剣（ーダ）”！」

俺が叫ぶと、目の前の少年からカウンターをもらう前に肩から飛び立っていたヤタの目が変化し、霧の杖にとまった瞬間、杖が藍（インディゴ）の炎に包まれた。

しかしそれも一瞬で、炎が消えた後には3メートル近い石の大剣を担いでいた。

「悪いですが、ここから先は全力全開で行かせてもらうのデス！」

言い切った瞬間、俺はその場で肩に担いだ大剣を両手持ちにして、瞬動で一気に近づき左から右へ薙ぎ払う。しかし少年はそれをしゃがむことで避けるが、俺は大剣を振り回した時に出る勢いを殺さずに後ろ回し蹴りを放つ。

だが、少年が瞬動によって後ろに下がることでそれを避けられてしまう。

俺は内心舌打ちをしながら、魔法を無詠唱で発動させる。

「魔法の射手・腐蝕の３４矢！」

「！魔法の射手・石の１７矢」

無詠唱で魔法の射手を包み込むように撃つが、相手はその半数を撃ち落とすことで回避する。

外れた魔法の矢は少年の周囲の大地を腐敗させた。

「初めて見るねその魔法は。君のオリジナルかい？」

俺は相手の言葉を無視して追撃を加えようとするが、相手のほうが早く瞬動を行いこちらの懐に入ってきた。
俺は迎撃をしようとするが、大剣であったため防ぐことができずに腹部に一撃をくらってしまい、さらに追撃として俺の肝臓（レバー）に膝をたたきこんできた。

「ゴッ……ガッ！」

俺は踏ん張ることすらできずに近くの家に突っ込んだ。
しかし少年は油断することなくその場で詠唱を始めた。

「ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲント　大地の底に眠る死者の宮殿よ　我らの下に姿を現せ　冥府の石柱」

詠唱が終わると少年の後ろから１０本の巨大な石柱が現われて俺に向かってくるが、俺は肝臓の痛みのせいでかわすことができずに直撃した。

「これで終わりというわけでもないだろう？」

「少しくらい休ませてくれてもいいと思うのデス」

俺は体を押しつぶす石柱を『腐敗』の能力で崩しながら立ち上がった。

「君の名前を教えてくれないかい？興味がわいたんだ」

「普通そういうのは自分から名乗るものデス。まぁ別にかまいませんガ。私の名前は都塚俊彦デス」

「おや、そういうものなのかい？それは失礼した。僕の名前はウーヌスという」

俺たちは名乗りあうと再び構えあった。俺は大剣を逆手に持ちかえウーヌスから目を離さず腰をひねり大剣を背中のほうへ持っていき、ウーヌスは半身になり、中国拳法のような構えをとった。

刹那、二人の姿はその場から消え、時折黒い影がぶつかり合う姿しか見えなくなった。

この時俺は、瞬動と虚空瞬動をミリ単位で調節しながら、相手の拳を大剣の柄で防ぎながらカウンターを狙っており、それに対して相手は振るわれた大剣の腹に拳をぶつけ回避を行った。

しかしそんな戦いも終わりに近づいていた。

簡単な話、相手を『殺す気』で戦っているか『殺さない気』で戦っているかの違いだけだった。

「なぜ君が僕を殺さないように戦ってるか知らないけど計画は実行しなければならない。だからそこで大人しくしていてくれ。ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンデント　障壁突破　石の槍」

「ガハッ！」

一瞬の隙を突かれて吹き飛ばされた俺は地面にたたきつけられると同時に石の槍で、喉、心臓、四肢を貫かれた。丁寧にも、石化の術式をまとわせた状態でだ。

しかし、幸いにも石化のほうは石の槍の周りにしか効果ができなかった。

「これでいいだろう」

ウーヌスはつぶやくと、俺に背を向けて呪文を詠唱し始めた。
すると、これまで動く気配のなかった村人たちが突然結界内で

体が

花弁となって

風に舞う桜のように

飛び散った。

あ……あああああぁぁ！？
喉を貫かれているせいで声を出せない俺は心の中で慟哭することしか許されていなかった。
なんで目の前の恩人である村人を助けることができなかった……俺は少なくとも互角に戦えていたはずなのになんで！？

……あぁ、そうか。あいつの言うとおりだ。俺は初めから殺す気ではなく殺さないように手加減をしていたのか……馬鹿だなぁ……互角の相手と戦うときは余計なことを考えたら負けるのにそんな基本

的なことも忘れてたのか。腐界でうんざりするほど理解したのに。
ははっ、だったたらお望み通りに殺してやろうじゃないか……全身全霊、己のすべてを懸けて！
この瞬間、俺の意識はブレーカーが落ちたように途切れた……

Ｓｉｄｅウーヌス

グチュという肉を引き裂くような音がして後ろを振り向いてみるとそこにはトツカが立っていた。

正直さっきので完全に心が死んだんだと思ったんだけどね。

僕は目の前の存在が不死者であることに目星をつけていた。だから、いくら不死者だといっても精神さえ壊してしまえば復帰するまでに時間がかかるはずなのに立ち上がってきた。

「もう少しいためつけ……グッ！？」

僕は顔面を反応をする間もなく殴り飛ばされた。

魔力過剰供給（オーバードライブ）か！？

殴り飛ばされながらもかろうじて視認できた藍色の炎を鎧のように纏った彼の姿は、まるで神話に出てくるベルセルクのようだった。

これは……起こしてはいけない獣を起こしてしまったようだね

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ第三者

ウーヌスを殴り飛ばした都塚は追撃を加えようと突貫するも、あたる寸前に瞬動によって回避されてしまう。都塚は回避されたため四肢を地面につけることになるが、目の前に吹き飛んでいた霧の大剣（グランデ・スパーダ・ネッビオーサ）を獣のように口でくわえた。すると、大剣は元の大きさの半分程度まで縮んだ。

「魔法の射手　連弾・水の３７矢」

ウーヌスが大剣を加える隙を狙って、魔法の射手を放つが都塚は躊躇せずに瞬動を使い弾幕に突っ込んでいく。魔法の射手は都塚の炎の鎧を突破することができずに弾き飛ばされた。ウーヌスの懐に潜り込んだ都塚は咥えた大剣で体を真っ二つにした。

しかし、少年の体は斬られた瞬間水に戻った。

都塚が剣を振りぬいてできた隙を突くように、魔法の射手で作った水たまりを媒体として転移していたウーヌスは後ろに下がり、詠唱を始めた。

「ヴィシュタル　リ・シュタル　ヴァンデント　来たれ　豊饒の土
　穿ち落とせ　土の槍」

都塚の目の前の土が詠唱終了とともに盛り上がって、槍の形となり貫こうとしたが文字通り紙一重で瞬動を行い回避する。それと同時に体勢を立て直し、口にくわえていた大剣を右手に持ち直した。またウーヌスも牽制として放った『土の槍』が都塚にとどく前に石の剣を右手に作り上げた。

そして、ウーヌスは瞬動で一足で間合いを詰めると袈裟がけに剣を振りおろした。

しかし、都塚はそれをよけるという選択をせず逆に前進して剣が十

分な加速をする前に肩で受け止め、右手の大剣の重さと強化された膂力だけで、相手の左腕を肩口から垂直に切り落とした。
また、今回は本体だったためか傷口から出血をしており膝から崩れ落ちた。

「意識が飛んでいるはずなのにここまで戦えるのか……君はとんでもない化け物だよ」

「……そういうあなたもデス。けれど、だいぶあなたも魔力を使ったのではありませんカ？あれだけの儀式と戦闘を行ったのデスカラ」

魔力が尽きたために、炎の鎧が解除され暴走していた都塚の意識は取り戻されていた。また都塚は暴走による無茶な動きのために体のいたるところに裂傷ができており、血が流れ出していた。戦いのさなか崩れ去った民家の壁に体を預けながら都塚は立ち上がり、大剣を引きずりながら膝をついているウーヌスに近づいていく。

「お互い、満身創痍これでケリをつけさせてもらいマス。ヤタ、形態変化」

霧の大剣は霧の杖と霧烏に分離し、霧烏の翼が都塚を包み、羽が開いた先には肩甲骨あたりから黒い羽根生やし、黒いバイザーをつけた都塚が立っていた。

その６（後書き）

申し訳ない。
あまりにも戦闘シーンが長くなりそうなので２話に分けてなるべく早く投稿したいと思います。

感想をもらえると作者が喜びますのでよければ送ってください

その7（前書き）

中二病が多発しますが生温かい目で見てもらえると嬉しいです。

その7

暴走していた時の記憶はあった。といっても、テレビで映像を見ているような感じだったが。
しかし、本能に従って自分の手で人を殺そうとしたときにはさすがに冷や汗をかいたが、手を下す前に意識を取り戻せたことは幸運だと思う。
正直に言うとこれから初めて魔獣や動物ではなく、自分の意思で人間の命を奪うことに少し……いやかなり恐怖している。
しかし、俺は目の前の少年を許すことができず、また二度と目の前で恩人たちが自分の躊躇いのせいで失わないようにするためにはこうするしかない。

「いや、こんな感情を持つのは偽善デスネ」

俺は自嘲し、杖に高密度の気を纏わせ右手で薙ぎ払った。
そして薙ぎ払われた杖は、狙いを外すことなく背後から石の剣を振りかぶっていたウーヌスの体を打ちすえた。

「なんで……それが分身だと気づいたんだ…い」

「あなたなら、私が人を殺そうとする瞬間にできる隙を狙うと思ったからデス。あと、足掻くことなく殺されようとしたことに不信を持ったからでもあるんデスガネ」

「ハハ……失敗したなぁ…なら今度は失敗しないようにしようか」

「次があればよかったのデスガ。今回は確実に仕留めさせてもらいマス……『腐敗』開始」

俺が能力を発動させた瞬間、杖が触れた位置から肉が腐り落ち始めた。

ウーヌスが悲鳴を上げる間もなく、全身の肉が腐り落ち残ったのは左腕の無い骸骨だけだった。

次の瞬間にはその骸すら、緩やかな風に吹かれ砂のように細かくなり散った。

「ハァ……さすがに疲れましたネ。今日はもう休みましょうカ」

俺は初めて人の命を奪い、精神が参って寝ることができないかと思っていたが、皮肉にもこれまでにないほどの激戦を行ったため今まで一番深く睡眠をとることができた。

一夜明け俺は盛大に村の崩れた民家の片端で嘔吐していた。

さすがに、一度精神が落ち着いたら自分の行ったことに対する恐怖が湧きあがってきてストレスによる多大な負荷が胃にかかってこんな状況に陥ってしまった。すでに、固形物は無く胃液だけを出しているためそこまで臭わないことが唯一の慰めにしかならない。

「さて……私ができるのは墓を作り早々に退散することデスネ。少なくともこの状況を見られたら私がこの村の住民を皆殺しにしたようにしか見えないでしょうシ……本当に人生とはままならないものデス」

俺は独白した後、村に落ちていた木材と紐で簡素な十字架を作り村

の中央に立て、朗々と詠唱を始めた。

『The world was filled with departed souls《世界は死霊達で満ちている》』

『The earth was rotted and the water is blood《大地は腐肉で水は血潮》』

『My body is dose not die through thousand struggle either《数多の戦いを潜り抜けてもこの身は朽ちず》』

『I am never saved《唯一度の救いもなく》It was only despair《進んだ先には絶望のみ》』

『I curse the world on the earth which decayed. Waiting for one's arrival《生き残りは一人。腐敗した大地で世界を呪う》』

『I have regret but I am not dragged in it.《だが、我が生涯に意味は在り》』

『Ｔｈｉｓ　ｗｏｒｌｄ　ｗａｓ　”Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｃａｒｎｉｖａｌ”　《この世界は死霊達の物だった》』

少なくとも死者に送るべき詩ではなかったが、少年に殺された人々の魂の怒りや憎悪すらも自分の責任だと思っていた俺はこの詩を送ることでそれを偽善や自己陶酔と言われても受け止めようと思っていた。

さて…目撃者が来ないうちに逃亡しますか。

俺は瞬動術を使って村から離れて行った。
しかし、この時俺は様々な要因――例えば空腹やストレスなど――によって監視されていたことに気がつかなかった。
そして、半月後俺は村を滅ぼした存在としてめでたく１０万ドラクマの賞金首となった。

その7（後書き）

投稿が大幅に遅れてスイマセン！
しかも時間をかけて作ったというのにかなり短い！

ついに、お気に入りが１００件を突破しました。登録してくださったみなさんありがとうございます。
感想を書いてもらえると、作者も喜びますんでよろしくお願いします。

とりあえず次は原作１００年前の話を書いて、そのまま大戦編へと突入する予定です。

その８（前書き）

転生してから大体１００年後の話です

後、アスナの年齢に関して詳しいことが分からなかったので勝手に捏造させてもらいました

その8

Ｓｉｄｅ都塚

今俺はオスティアの王宮の中で雑用係として働いている。理由は簡単で……路銀が尽きたからだ。

これまでは、適当に襲ってきた賞金稼ぎを狩ってその装備を売却することで稼いでいたんだが、最近は襲われることもなくなったため旅をしながら細々と訪れた村の依頼を受けて稼いでいた。しかしオスティアに入ってしばらくしたら路銀が尽きてしまったため、どうしようかと考えていたら、王宮の雑用係募集のポスターを見つけそれに跳び付いたというわけである。

とりあえず、こんな簡単に王宮が人を雇っていいのか？俺としては渡りに船だったが……

軽く王宮の危機管理意識に疑問を持ちながら、裏庭にある井戸から水を汲んで調理場に行こうとしたらドンと左足に衝撃が走った。しかも間の悪いことに、王宮内では力のほとんどを制限しているため満足に踏ん張ることもできずにいたが、これまでの経験から左手に持っている水の入った桶を思いっきり振り回すことで体勢を立て直すのと桶による攻撃を反射的に行い

「キャッ」

少女の物と思われる驚いた声を聞いて凍りついた。まず、王宮内に子供がいることはほとんどない。いたとしてもそれは、大臣など要職に就いている人たちの子供である……つまり今の状況を表すならば

お偉いさんの子供を傷つけようとした→クビｏｒ私刑

やべぇ……お先真っ暗だ……謝って逃げるか？いやそれじゃあまりにも不義理すぎる。どうする……どうする俺！？

俺は頭を抱えて悶々と悩んでいたがある結論に達した。

日本の伝統技能ＤＯ・ＧＥ・ＺＡで許しを乞う！これしか生き残る道はない！！

「すいませんデシタ！この償いに何でもさせてもらいマス……ですから親御さんに言い付けるのだけは勘弁してクダサイ！今、ここを追い出されると大変困るのデス。ですから……なにとぞなにとぞ平にご容赦ヲ……！」

恥も外聞もなく流れるように土下座（余談だがこの時の土下座は１００年以上生きてきた俺にとって最高ともいえるものだった）を敢行した俺だったが、いつまでたっても返事をしない少女に疑問を持ち恐る恐る顔を上げると、そこには感情を顔に出すことなく俺を見下す少女がいた。

この時少しゾクッとしたのは内緒だ……ロリコンの上にＭだなんて救いようがなさすぎる。

俺を見下す少女を一言で表すなら言葉が悪いが『人形』というのが一番ぴったりだろう。

感情を浮かび上がらせないその瞳がより顕著に言葉を強調する。

さらに付け加えるならば、彼女の眼は左右で色が違っていたことも拍車をかける。

右眼が空色、左眼が緋色という世間一般でオッドアイと呼ばれる眼をしていたからだ。

正直にいうと俺はこの時、目の前の少女に見惚れていた。特性である『ロリコン』に関係なくだ……

「あなた、誰？」

「ハ？」

唐突な質問に思わず疑問で返してしまったが、この少女は俺が何者か訪ねてきてるんだよな……俺の命運もここまでか……さらばオスティア王国また１００年後……

軽く現実逃避を始めたが次の一言で我に返った。

「賊？」

「唯の雑用係デス。人手が足りなくなったらしいので働きに来ましタ」

「そう……」

それっきり少女は黙り込んでしまい、何とも言えない気まずい空気が場を満たした。

何とかして場の空気を変えなければ！

そしておれが行ったのは、

「私の名前はアンドレイといいマス。あなたの名前ハ？」

自分の名前（偽名）を名乗り、相手がどこの家系の子供かを知ることにした。この結果いかんによっては真剣にオスティアから逃げ出すことを考えなければならないからである。

まぁ、名前を聞いて判断するか。知っている名前だったら逃亡、知らない名前だったら続行という事で

そして目の前の少女は俺の予想を斜め上ではなく垂直に裏切るような答えを返してきた。

「アスナ・ウェスペリアーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「冗談……じゃなさそうデスネ」

さすがの俺も目の前の少女が冗談を言ったとしか思えなかったが、あれだけ長い名前をかまずに言えたことと王宮で王女の名前を名乗るという愚行を犯す馬鹿はいないと思ったため認めざるを得なかった。

「ところで何でこんなところに王女様がいるのデスカ？」

素朴な疑問にアスナは特大級の爆弾を落してくれた。

「賊に追われている」

「ッ…制限解除、プロテクトシェード！」

アスナが答えた瞬間、突然現れた殺気に対応するために自身にかけていた制限をすべて解除し、ネタで作ったが使い勝手の良い防御魔法である『プロテクトシェード』を左手を中心に展開する。
そして、こちらに向かってナイフが飛んできたが『プロテクトシェード』に触れた瞬間、弾いた。
しかし、殺気の持ち主は諦めきれないのか追撃を加えようとして瞬動で後ろを取ろうとする。それを俺は、あえて見逃し無詠唱呪文を発動させる。

「死霊喚起（カーニバル）！」

突如、地中から現れた存在に暗殺者は対応することができずに綺麗にアッパーカットをくらった。暗殺者も吹き飛ばされながらも空中で体勢を整え、無詠唱で雷属性の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を放ってきた。
無詠唱で作った幻術は一撃を加えた後すぐ消えてしまったため、壁にすることができない。
それにさすがの俺でも、あれをくらうと少しの間とはいえ体がマヒしてしまうためアスナを抱きかかえて、王宮の外壁に飛び乗った。
力量は大体上の下か。あまり長引かせるわけにもいかないし……仕方ないネタ技で終わらせるか。

『Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ　ｗａｓ　ｆｉｌｌｅｄ　ｗｉｔｈ　ｄｅｐａｒｔｅｄ　ｓｏｕｌｓ《世界は死霊達で満ちていた》』

詠唱が終わった瞬間俺の周りを囲むように白、赤、黒、紺の鎧を纏った骸骨の騎士が現れた。

「命ズ。我らを守り、敵を逃がすナ」

俺の命令が終わった瞬間、人形のように直立していた４人の騎士は腰から剣を抜き周囲を警戒し始めた。

これで時間稼ぎは終了。後は詰めだけだ。これで失敗したら眼もあてられんし、きっちりしますか。

「レイル　トレイル　ヴァンデント　来たれ　金色の鎚　汝、数多の戦いを経て　究極に至る　破壊神の怒りなり」

俺は詠唱をいったん止め、騎士たちの戦いを見てみるがさすがの暗殺者も突破するのに時間がかかりそうだというのが分かった。

んじゃま、細工は流々仕上げをご覧あれってな！

「……ゴォォォルディオン……クラッシャァァァァ！」

詠唱を終えた瞬間、全長が３ｍほどの金色の鎚がオスティア宮殿の上空に現れた。

今回は、さすがに王宮内という事もあり、大きさは本家の物よりもはるかに小さいが、それでも内包した魔力は桁外れだし、実際に命中した対象を光にすることだってできる。

「すごい……」

さすがのアスナもこの光景には驚かずにはいられなかったのか先ほどまでの無感情な表情が嘘だったかのように眼を見張っていた。

よし、掴みは完了。さっさと片を付けて逃げましょうか。

「すぅ……光に…なれえええええええぇぇぇ！」

やはり、無意味だと解っていてもあの某勇者王の必殺技の為か無意識のうちに叫んでしまう。まぁ、アスナちゃんの驚いた顔も見れたし良しとするか。

暗殺者は何度も逃げようとするが、そのたびに騎士に邪魔されて逃げることができずにいた。そして、金色の鎚は俺の作り上げた幻術と共に暗殺者を巻き込んで城壁ごと光にしていった。

……やば、調子に乗って城壁ごと光にしちまった……どうしよう。

俺は自分のしでかしたことに頭を抱えていたがアスナに服を引っ張られていることに気がついた。そして、アスナの方を向くとそこにはさっきまでの無表情は無く、新しいおもちゃを見つけたような子供の顔があった。

「ねぇ、今の魔法教えて！」

「残念ですがあの魔法は一子相伝の物で……」

アスナちゃんに『ゴルディオンクラッシャー』の術式を教えてくれとせがまれたが、あの魔法自体、８徹して精神が狂ったようにハイになった状態で作ったので自分でも術式の一部がブラックボックスと化している。そのことを言うのは流石に恥かしいため、嘘を織り交ぜて煙に巻こうとしたが、

「動くな、賊め！」

王宮の衛兵に囲まれて説明が尻切れトンボになってしまった。

……さすがにあれは目立ちすぎたか。しかも、暗殺者と間違えられてるし……どうしよう

その８（後書き）

今回も二話に分けて投稿させていただきます。

感想お待ちしております

その９（前書き）

少しオリ設定が入っております

その9

Ｓｉｄｅ都塚

いま、俺は目隠しされ両手両足に枷を付けられた上にハマノツルギとかいう大剣でさっくりと腹部を貫かれています。
うん、この剣なんか知らんけど俺の魔法障壁をあっさりと抜けてきた上に、再生を阻害してるせいでめちゃくちゃ下腹部が痛い。それに幻術も解けてしまった。
しかもこの痛みが普通に我慢できてしまうという事がさらなる不幸だ……腐界じゃあ生きたまま内臓を喰われるってこともあったから痛みに対して無駄に抵抗が付いてしまったからなぁ。
そんなことをつらつらと考えてると、ギィィと牢屋の扉が開く音がして兵士の物と思われる足音が聞こえた。

「出てこい。今から王直々に裁きを下される」

それだけ言うと、俺は自分の足で立たされ牢から出た。

Ｓｉｄｅ近衛兵

「喜べ、新入り。お前に栄えある初任務をくれてやる」

近衛隊長に呼び出されて聞かされた第一声がそれだった。
正直意味がわからない……確かに俺が近衛兵になって1月も経っても雑用ぐらいしかさせてもらっていなかったが、突然の呼び出しに任務の授与。どう考えても怪しい任務にしか思えなかった。けれど

そこは宮仕えの悲しい義務、どんなに怪しい任務でも遂行しないと明日の飯が食えないからね……

「いったいどのような任務でしょうか？」

「なに、ただ人を一人連れてくるだけだ。新入りのお前にベテランが5人で、だ」

これは困った。さらに不信感が募ってしまった……どうやら目の前の隊長は精神が錯乱しているらしい。何で人を一人連れてくるだけで6人も必要なんだ！？

「ちなみに、今回は全員完全武装を義務付けられているからさっさと詰所行って部隊長から指示を仰げ」

いったい何もんだ俺達が連れてくる人ってのは！？

軽く放心しながら歩いていたせいか、いつの間にか詰所に到着しており、あれよあれよという間に完全武装をして部隊長の指示を仰いだ

「今から地下牢にいく。俺達が連れてくる存在は、昨日アスナ王女様をさらおうとした賊だ。各自、最大限に注意しろ……奴は『ハマノツルギ』によって魔法が使えない状態だが体を貫かれても生きている正真正銘の不死者だ」

ハハハ……ゴッド俺は何か悪いことをしましたか？そりゃあ俺だって品行方正な人生を歩んできたとは言えませんよ。でもね、何でいきなり最初の任務が不死者の連行なんでしょうか。……遺書、書いとくべきだったかなぁ。

というわけで地下牢に来たわけですが……とんでもないね、これ。ここまで厳重に体に枷を付けられた罪人を見たことがないし、腹に大剣が刺さってるのに痛みにのたうち回った痕跡もないって……部隊長が警戒するわけだ。

そんな俺の心情を無視して、部隊長は牢の扉の鍵を開け中に入っていき

「出てこい。今から王直々に裁きを下される」

……隊長、相手を刺激しないでください、俺はまだ死にたくありません！

俺の期待も裏切られ目の前の不死者は腹部に剣を刺したまま立ち上がりこちらに向かって歩いてきた。枷が付けられているのにも関わらず、だ。

どうかこの人が暴れませんように……

そんな事を思いながら不死者を謁見の間へと連れて行った

Ｓｉｄｅ都塚

牢から出されてから大体２０分ほど歩かされて突然足を止めるように言われた。

処刑場にでもついたのかねぇ。はぁ、なるべく痛く無いように処刑してほしいよ……まぁそんなもの望むべくもないんだがな。

「目隠しを外せ」

……朝日がまぶしいな。いや、現実逃避はここまでにしておこう、何で目の前の高座に国王とアスナちゃんが……ハッ、昨日の礼を言うつもりか！……無いなそれ。飯を食ってないせいで頭の働きも鈍ってるし、やってらんねぇ。

「国王の御前だ。頭を下げろ！」

近衛隊長と思わしき人物に無理矢理頭を下げさせられた。

「これから、貴様に対して昨日の事件に関して質問する。貴様は虚偽の回答は許されていない。もし行った場合、ケルベラス渓谷に突き落とすことを忘れるな」

「了解デス」

虚偽の回答を行ったらケルベラス渓谷に突き落とすとか、いったいどこの重罪人ですか。

……そういえば６００万ドルの賞金首なんだよな俺

たしかにあの渓谷は魔法無効化領域になってるから普通の魔法使いが落ちたら助からんよ。

俺は能力を使って逃げることができるがな！

「まず最初の質問だ、昨日の金色の光はなんだ」

「私の作り上げた魔法で名称は『ゴルディオンクラッシャー』と言いマス。分類は重力魔法デスネ」

「……次だ。何が目的で王宮に侵入した」

「まず間違いがあるようなので訂正しますが、私は侵入したのでは

なく町にあった求人情報を見て働きに来たのデスヨ」

「ならば何が目的だ！？」

「いやぁ、お恥かしながら路銀が尽きてしまいまして……後、三食給料宿付きの仕事で大変魅力的でしたノデ」

うん、俺は嘘を言ってない。けれど何故か俺に質問していた人は頭を抱えうずくまってしまったため小休止が入った。
しばらくしてから、別の人間が来てまた質問を始めた。どうやら服装などを見る限り近衛の人間らしい

「あ、え、ああの」

「落ち着いてクダサイ。今の私は血が足りなくて動けないので恐れる必要はありませんヨ？」

「何でそこで疑問系！？逆に不安になりますよ！！」

「おお、いい突っ込みデスネ。でもあなたの上司と思わしき人が睨んでるので早く質問してくれませんカ。衝動的に消そうとしてしまいそうナノデ」

「は……はは、それは勘弁してください。では、何故アスナ様を御助けになったのですか？もし助けなければこんなことにならなかったはずなのに」

「……簡単な話デス。私は全ての幼女及び少女の味方デスカラ！！」

「とりあえず、生かしておくと碌な存在じゃないという事がわかり

ました。国王、即刻ケルベラス渓谷にたたきこむべきです」

「まぁ、まて。そなた名をなんという？」

これまで、沈黙を保っていた王様が俺に向かって質問してきた。兵士との掛け合いのせいか微妙に顔が引きつっていたが。

「……都塚俊彦デス」

俺が名を告げた瞬間、部屋は騒然となった。

まぁ当然か、６００万ドルの賞金首が目の前にいるんだからなぁ。つーか俺に質問していた近衛兵は茫然自失してるしどうやって収集付けようか

「鎮まれぇい！！　この者は、賞金首以前に我らが国の姫を助けたのだ。何故、騒ぐ必要がある！この者に礼儀を示すのが先ではないのか！？違うというなら申してみよ」

王の一喝により場は一瞬にして静寂に包まれた。そして、玉座から立ち上がり周りを見下ろすが誰も反論するものがいないと見ると再び、座りなおした。

「すまなかったな……何か、望みはあるか。出来うる範囲でかなえたいと思うのだが」

「いえいえ、今のは普通の反応デスヨ。それにしても望みデスカ……頑丈なナイフを貰えませんカ？これまで使っていたものが折れてしまいまして給料で買おうと思っていたのデス」

俺がそう言うと、王は頭に手を当て深々とため息を吐いた。
あれ、俺ミスった？唯ナイフをくれと言っただけなのに何でため息をつくんだ？
「……解った。少し待っておれ」
それだけ言うと王は玉座から立ち上がり部屋から出て行った。それと共に近衛兵も先ほど質問していた男と他に二人残し追っていった。そして、残った近衛兵たちが俺からある程度距離を取ると玉座の横にいたアスナが都塚に向かって走り出し、近衛兵たちがあわてて止めようとするが、その手を潜り抜けて都塚のもとにたどり着いた。そして不思議そうに尋ねた。
「痛くないの？」
「？……あぁ、剣のことですか。痛くないと言えば嘘になりますが別段我慢できない痛みというわけではありませンヨ」
俺は一瞬彼女が何を言っているのか理解できなかったが、少し考えてから自分の腹部に突き刺さった大剣のことだという事にたどり着き笑いながら答えた。
「ちょっと待って」
それだけ言うと、アスナは都塚に刺さっている『ハマノツルギ』に手をかけ一気に引きぬいた。
しかし、2メートルほどもある『ハマノツルギ』を支えきれるはずもなく抜いた勢いで尻もちをつき、その刃が傷つけようと迫る！
剣が抜けた瞬間、魔力を全身に廻らせることで急速な自己治癒を行

い傷をふさぐ。そして、アスナを傷つけようとする大剣の峰を掴むことで何とか事なきを得る。

「ふぅ。だいじょ……」

そして俺の意思はここで途切れた。

「知らない天井だ」

お決まりのセリフを吐いて気絶した理由を思い出した。

急速治癒をした上に血が足りない状態であれだけ急激に動けばそりゃぁ貧血も起こすよな。あーアスナちゃんも驚いてるだろうしどうしたもんか。

ちなみに今、都塚がいるのは学校の保健室のような一室である。とはいっても、簡素なベッドが1つあり薬品類もそれなりに充実しており、窓からは月明かりがさしている。そして、ベッドの上で軽くこれからのことを考えていると部屋の戸が開く音がした。

「おお、起きたか」

何故か扉の前には王様がいた

ちょっま、何で王様がこんな所にいるの!? しかも護衛もつけずに

犯罪者に会いに来るって本気で頭がいかれてるのか！？

「とりあえずお主の処分が決まったから来たのだがな、どうやら死罪がお望みらしいな」

「大変申し訳ありませんデシタ。どうかご慈悲ヲ」

「冗談だがな、お主に報奨を渡したうえで国外退去となった。すまん、姫を助けてくれた恩人に対しこのようなことしかできんで」

「彼らが民の安全が第一だと思うのは当然デス」

苦渋の表情を浮かべながら王は謝るが、都塚はさして気にした様子もなくむしろ当然だと受け取っている節もあった。

「それでは、明日の早朝にこの王宮を出マス。それで大丈夫デスカ？」

「本当にすまん……報奨はここから出るときに渡す。ゆっくり休んでくれ」

そう言って、王は部屋から出て行った。

はぁ本当にあの王様には感謝しても感謝しきれないな。俺をこの王宮にとどめておくだけでもかなりの反対があっただろうに。

次の機会があったらうまい酒でも献上するか。

そんなこと思いながら都塚は再び眠りに就いた。

翌日、日が昇るより先に都塚は眼を覚まし王宮内にある使用人たち

の部屋へ行き自身の荷物を回収、裏門へ回った。
そして裏門には、前日に尋問してきた近衛兵が立っていた。

「都塚さん。これをあなたにと、そして王の伝言です『息災でな』と」

近衛兵が差し出したナイフは二本あり革製のホルダーに納められていた。
そして都塚はホルダーごとナイフを受け取るとホルダーを右の腰と背中側に装着し、近衛兵に一礼して王宮を去っていった。

その9（後書き）

期間が空いてスイマセン。次から大戦編へ行きます。

感想をお待ちしています

その１０

Ｓｉｄｅ都塚

目の前には右腕が無かったり、頭の半分が吹き飛んで脳が見えたり、黒こげになってもとの性別すらわからなくなったりしている死体の山がある。これらの死体は、ついこの間から始まったメガロメセンブリナ連合とヘラス帝国の戦争に巻き込まれたこの街でできたものだ。

俺の作り上げた『死体喚起（カーニバル）』の幻術で死体の回収をしているが……やっぱりなれないな、死体を見ることは。

でも、このまま死体をほっておくとネクロマンサーなんかが利用しそうだし……俺がお前らを埋葬することで少しでも魂に安らぎを与えられるならやってやるよ。だから、彼岸の彼方へ安心して行ってくれ。

そして1時間後、『死体喚起』で確認できるだけの死体が集まったことを知ると俺は目の前の死体の山をネクロマンサーの類に利用させないため、完全に消滅をさせるため『ゴルディオンハンマー』詠唱を始めた。

「レイル　ト・レイル　ヴァンデント　来たれ　金色の鎚　汝……！？」

俺は突如背中に悪寒が走りその場を瞬動で離れた。すると、一呼吸の間を開け俺のいた場所を死体の山を巻き込むようにして雷が通って行き盛大に土ぼこりを上げた。

そして、土ぼこりが収まり死体の山があった場所を見てみるとそこには先ほどよりもさらにひどく損傷した死体が散らばっていた。

は……はは、死者に安らぎをくれてやるつもりが無いってか、おい。いくらなんでもそりゃあないだろう、いくら戦時中だからといっても死者に鞭打つような行為は酷すぎるぜ。

そんなことを思っていた俺に対しさらに追撃としてか『魔法の射手』が襲いかかってくる。けれども俺は、その場から動くこと無く右手で腰の裏手に装着してあるナイフを抜き、死ぬ気の炎を纏わせ迫りくる『魔法の射手』を全て斬り落とした。

Ｓｉｄｅナギ

「なぁ、詠春本当にこっちの方向であってるのか？人っ子一人いないぜ」

「確かに不自然だな……たしかこの先にはそれなりに大きな街があったはずなんだが」

赤毛の少年―ナギ・スプリングフィールド―の発言に対して二十歳ほどで野太刀『夕凪』を左手に持つ黒髪の東洋人―近衛　詠春―が相槌を打ち、自身の疑問と違和感を口に出す

「同感です。これは何かあったとみるべきでは？」

「ワシもアルに賛成じゃ。何か嫌な予感がする」

「なら、早く行こうぜ！『加速』」

「おい！ちょっと待て！！」

白いフードコートを身に付けた男―アルビレオ・イマ―が詠春の違和感に対し賛同の意を示し、白髪の少年―ゼクト―もアルに賛同する。

そして、ナギがアルとゼクトが賛同の意御示すや否や、自身が持っていた乗り加速させ、それに追従するように残り三人も走り出す。

そして、ナギがたどり着いて見たのはすでに廃墟となった街だった。

俺があいつに気付けたのは本当に偶然としか言えなかった。何故なら、もうすでに住民の死体がほとんどを広場に山をなすほど集めていたからだ。そして、男は死体の山を前にして何をする気かしらねぇが呪文の詠唱を始めやがった。

クソッタレ、間に合わなかった！？いや、まだ詠唱を始めたばかりだから妨害をすれば！

「来たれ雷精　風の精　雷を纏いて　吹きすさべ　南洋の嵐　雷の暴風！」

男の背後から破壊の雷が迫るが、振り返ることをせず瞬動術で回避した。

「なっ！……　魔法の射手９矢！」

ナギは『雷の暴風』が回避されると多少の驚きがあったものの、すぐに追尾性能のある『魔法の射手』を無詠唱で九矢放つがそのいずれも腰から抜かれた藍色の炎を纏ったナイフに防がれた。

そして、『魔法の射手』からナギの位置を割り出したのか男は殺気を込め睨みつけていた。

Ｓｉｄｅ第三者

ナギと都塚が睨み合いを開始してからすぐに詠春ら三人が到着した瞬間、都塚は瞬動によりナギに接近し、瞬動の速度と自身の体重を乗せたレバーブローを放ったがそれをナギは勘で避ける。

「『重力の枷』！」

「斬岩剣！」

攻撃の後にできた隙にアルが無詠唱の重力魔法により都塚の動きを封じ、詠春の一撃が迫る

しかし、都塚はアルの放った重力魔法を利用し、自身の重心を限りなく前に傾け初速を得るのと同時に詠春の一撃を回避し、逆に詠春の懐に入りその命を奪わんと首にナイフが奔るが、横から飛んできた５０にも及ぶ『魔法の射手』により中断しなければならなかった。

都塚は、自身に向かって飛んできた『魔法の射手』を『腐敗』の特性を加えた魔法障壁で防ごうとするが、一撃一撃に込められた魔力が多かったためか何本かが魔法障壁を突破してきてそれを右手で持っていたナイフで最初と同じように斬り伏せた。

『魔法の射手』を防ぐときにできたわずかな隙を逃さず詠春は虚空瞬動により都塚から離れナギ達のところまで退いた。

「それなりの使い手のようデスネ……何者デスカ？」

「ケッ、お前みたいな外道に名乗る名前はねぇよ！

百重千重と　重なりて　走れよ稲妻　千の雷！」

始動キーを唱えずに放った「千の雷」が都塚に迫るが、それを見てさすがに避けざるを得ないと思ったのか、後方に行った瞬動により回避する。

しかし、それを読んでいたかのように上空からアルが、右から詠春が、左からゼクトがそれぞれ追撃の技を放つ。

「世界の枷　其は平等に在り　我らを縛る力　汝、我が意に添い敵を討たん　重力の破鎚」

「極・雷・鳴・剣！」

「来たれ地精　大地を満たせ　黒土の世界の豊土と清流よ　仇為す者に裁きを　崩れる大地」

上空から重力の鎚が、右から雷が、左から土石流の奔流がそれぞれ都塚に向かって迫りくるが、魔法障壁に自身が持つ魔力の5分の1を注ぎ込み『腐敗』の特性を持たせ、土石流の方に左手を向け防御魔法『プロテクトシェード』発動させる。

そして、魔法障壁に三方から技が突き刺さる。しかし、『腐敗』の特性を持った魔法障壁を突破できたのは『崩れる大地』のみで、それにしても左手に展開された『プロテクトシェード』により完全防御されてしまう。

技の余波で出来た土煙を隠れ蓑にして、ナイフを右腰のホルスターにしまい、代わりに左腰につけてあった匣（ボックス）を全て左手に持ち開匣した。

「ヤタ、形態変化大剣（カンビオ・フォルマ・スパーダ）！」

土煙が晴れた先にナギ達が見たのは手甲を身につけ大剣を担いだ都塚だった。これだけならばアーティファクトだろうと思いナギ達が驚くことは無かったのだが、いずれの武装もとてつもない密度の気の炎を纏っていることが見て取れたからだ。

なぜなら、本来気は魔力と反発しあうためそれ専用のアーティファクトでなければ使用できないからだ。（例外として気と魔力の合一である『咸卦法』がある）

「サテ……私にこの武装を出させたんデスカラ、少しはもってクダサイ」

それだけ言うと、瞬動を使い詠春の後ろに回り大剣を振り下ろすが回避される。しかしその軌道を無理矢理、気によって強化された腕力だけで斬り落としを斬り上げに変えた。

振り下ろした後にできるはずだった隙を狙って『斬岩剣』を放とうとした詠春だったが突然の剣の軌道の変化に反応することができずに鞘を持っていた左腕を切り落とされる。

「テメェ！」

その光景を見たナギは、左側から雷属性の『魔法の射手』を放つ。しかし、それは魔法障壁によって阻まれ、お返しとばかりに降り上げられた大剣が振り下ろされる速度を持ち左側に薙ぎ払われる。それを見たナギは体を地面すれすれまで屈めることで回避し、無詠唱の『雷の斧』を放つ。

この時、死ぬ気の炎を使うために魔力障壁が解除されていたため、まともに背中に喰らってしまい吹き飛ばされた。

一切の防御をすること無く背中に『雷の斧』をくらった都塚は流石に生きていないだろうと思いナギは斬り落とされた腕を持って詠春のもとへ瞬動を使い行く。
そこでは、アルとゼクトが治癒魔法を詠春にかけており出血がだいぶ収まっていた。

「おい、詠春。腕、持って帰って来たぜ」

「あい…つは、どう……なった？」

「たぶん死んでんじゃねぇか？『雷の斧』を直撃させたし」

「そうですか。まぁ、ナギの『雷の斧』を直撃されて生きてる人間なんてそうそういませんからね」

一同が戦闘が終わったと思い込み気を抜いた瞬間、それは現れた。

「レイル　ト・レイル　ヴァンデント　来たれ　眠りし者達よ
その身は幻想であれど現実を侵す　始めよ死者達（なかま）を増やす戦いを
死体喚起（カーニバル）」

都塚の詠唱が終わった瞬間、ナギ達を囲むようにして地中から鎧を纏ったゾンビが何百と這い出してきた。

「あいつ、やっぱりネクロマンサーか！」

「ナギ、ここはいったん引きましょう！この軍勢相手に詠春を庇いながら戦うのは至難の業です！」

「でもよぉ！」

「ワシもアルに賛成じゃ。目の前にいる相手と戦っていては詠春が持たん」

ナギは都塚と戦うことを望んでいたがアルとゼクトの反対によりあきらめざるを得なかった。
そして、ゼクトが結界魔法でアルの転移魔法を発動させる時間を稼ぐ。都塚はそれを防ぐため、瞬動で加速し死霊達を巻き込みながら突きを放つが結界に弾かれる。
そしてその反動を利用した斬撃が結界とぶつかりあい、徐々に結界にひびが入り始め、後わずかでゼクトに剣が届くという瞬間にアルを中心に転移魔法の魔法陣が展開され目の前から逃げられてしまった。

空を切った剣は、減速することも無く大地をえぐり止まる。ナギ達に逃げられたことで逆に冷静になったのか都塚は舌打ちを一つすると、『死体喚起』によって創り出した幻術のうち５０体ほど残し、ナギの『雷の暴風』によって吹き飛ばされた遺体を再び回収し始めた。

一時間もすれば辺りに散らばっていた遺体は回収することができたがそれらは先ほどよりも遥かに酷いものになっており、正気の人間が見ればそれだけでトラウマを負いそうな光景が広がっていた。
その光景を見た都塚は一瞬、悲しみからか顔をゆがめたがすぐに『

ゴルディオンハンマー』の詠唱を始め、今度こそこの街で確認できるだけの遺体を光にすることに成功した。

しかし、都塚の顔は晴れずむしろこの先もこの戦争によって見知らぬ幼女や少女が傷ついていくことに悲しみを浮かべていた。

その１０（後書き）

突然ですが主人公設定みたいなものを書いたほうがいいですか？
とりあえずは作ってあるのですが……皆さんの意見次第で出したい
と思います。
感想お待ちしてしています

その11

Ｓｉｄｅ都塚

すでにメガロメセンブリア連合とヘラス帝国の「大分裂戦争」が開戦されてから1年以上たった。
この一年間は本当につらいことが多かった。俺は主に戦端が開かれた土地へ行きそこで亡くなった兵士たちを『死体喚起（カーニバル）』で集めて、『ゴルディオンハンマー』で光にして弔うことと、負傷者を見つけては治療するという偉大なる魔法使い《マギステル・マギ》の真似ごとをしていた。基本的に幻術と偽名を使う事で賞金首『都塚俊彦』であることはばれていなかった。
けれども、治療のかいなく無くなっていく人々もまたいて、その遺族から恨み事や憎しみをぶつけられることは珍しく無く、酷い時には寝ているときに恨みを持つ何人かが手を組み中級魔法を放ってきたこともあった。

今、俺はグレート＝ブリッジに程近い廃村で過ごしている。
ここはグレート＝ブリッジ争奪戦の時の流れ弾の被害が奇跡的にもほとんどなかったためか、かなりきれいに家々が残っておりそのうちの一つを借りて、その隣を魔導書などを片付けておく封印書庫として利用させてもらっていた。
そして封印書庫の整理や安定化が一通り終わり、久々の睡眠を取ろうとし戦争が始まってから癖になった『霧の杖（バストン・ネッビア）』を枕元に置くことをしてから眠り始めた。

そして、どれくらい眠ったか分からないが突然遠くから砲撃音が聞こえ始め、俺は『霧の杖』を持って急いで家から出ると流れ弾が俺

の家と……隣の封印書庫の最終封印を残して完膚なきまでに破壊されていた。

……某殺人鬼の台詞を借りるなら傑作ってか。何日も何日も寝ずに幾重にも封印術式を重ねてどこぞの龍樹ですら簡単に抜け出すことのできないものを作り上げたのを一瞬で無に返すだと……

……どっちが放った攻撃かなんか関係ねぇ。魔道書の封印が終わり次第、両方潰す。

Ｓｉｄｅナギ

「光に……なれえええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

今、俺たちは信じられねぇ物を見ている。突然、叫び声が聞こえたと思ったら次の瞬間には巨大な金色のハンマーが俺達の目の前に現れて、それが帝国の防衛艦隊に横薙ぎに振るわれて光の粒子になりやがった！

いや自分でも何言ってるか分かれねぇが事実、目の前で起こったことだ。

そして俺達が目の前の光景に呆気にとられていると今度はこっちに……

「ってちょっと待て！こっちに来てるぞ！！」

「これは……不味いですね」

俺たちは全速力で離れたが、艦隊の方はそのほとんどが金色のハンマーにぶつかり消滅した。

そう、文字通りの消滅だ。そこに艦隊があった名残として帝国の艦隊と同じように光の粒子が漂っているだけだった。

「……お師匠、こんなことができる魔法ってあるのか？」

「少なくともワシは見たことが無い」

「興味深いですね……」

「さすがにあれをくらったら俺でもやべぇな」

「現実逃避するな！こっちに来るぞ！」

Ｓｉｄｅ三人称

詠春が警告を発するや否や森の中から大剣を逆手で構えた都塚が虚空瞬動を使い『紅い翼』のメンバーに突撃する。

「来たれ《アデアット》『千の顔を持つ英雄』！」

「神鳴流決戦奥義　真・雷光剣！」

「百重千重に重なりて　走れよ稲妻　千の雷！」

それを見たラカンが『千の顔を持つ英雄』、詠春が雷光剣、アルが重力魔法、ナギが『千の雷』をそれぞれ迎撃するために放つ。

「ボルディングドライバー　ｖｅｒプロテクトボルト！」

都塚はナギ達の攻撃を見て、大剣から左腕を離し自身の持つ最硬の

防御魔法である『プロテクトボルト』を発動させると、左腕に装備されていた『霧の籠手』から全長1メートルほどの藍色のマイナスドライバーが現れた。そしてそれを目の前の空間に突き刺すようにすると、突きつけられた部分を起点として直径2メートルほど空間が歪み、ナギ達の攻撃が空間の歪みを避けるようにずれた。
そして迎撃に参加せずに都塚の能力を分析していたアルは彼の防御魔法のからくりに気付きナギに教える。

「……っそういうことですか。ナギ、彼の防御魔法は重力によって空間を歪めることでこちらの攻撃を逸らしています！私が一時的に中和しますその間に……！」

「ハッ、上等！ジャック併せろ！
百重千重に重なりて　走れよ稲妻　千の雷！」

「オウ！斬・艦・剣！」

『斬・艦・剣　雷光一閃！』

アルの重力魔法により空間の歪みがほんのわずかとはいえ一時的に中和されたその瞬間にラカンが召喚した『斬艦剣』にナギの『千の雷』を纏わせ両断する『斬艦剣　雷光一閃』が都塚に迫るがそれを虚空瞬動で横に避ける。
しかしそれを見たナギは悔しがるどころか逆にいたずらが成功したかのような笑みを顔に浮かべた。

「お前が避けることなんて織り込み済みなんだよ！解放（エーミッタム）」

ナギが遅延呪文を解放した瞬間『斬艦剣』に纏われていた『千の雷』が解放され周囲にその名の通り千にも届きそうな雷が撒き散らされ、

そのうちの一条をまともに食らってしまい、爆煙に包まれた。
しかしナギ達は油断することなく追撃するためにそれぞれが持ちうる最強の技の溜めに入る。そして爆煙の中で都塚は意識を保っていたが体が痺れて動けなかったが、爆発的なナギやラカンの力の高まりに気付き、無理矢理『死体喚起（カーニバル）』を発動させ実体を持つ幻影を何百と生み出し、自分に覆いかぶさらせ万が一の準備を始めた。
そして一瞬後に

「千の雷！」

「雷光剣！」

「ラカンインパクト！」

ナギ、詠春、ラカンの最強の攻撃が都塚に叩き込まれる！
そして再び爆煙が巻き起こり、そこにはクレーターしか残っていなかった。

「はあ…はあ…これだけやればさすがに生きてねぇだろ」

「つーかこれで生きてたら本物のバケモンだぜ」

「油断しないでください…死体が確認できない今、生きてるかもしれないのですよ」

「アル……さすがに心配しすぎじゃないか？」

「いや…ワシもアルに賛成じゃ。もし生きていて背後から奇襲を受けたらワシらでも危険すぎる」

アルとゼクトの言葉に詠春もさすがに気を緩めるわけにいかないと思い再び気を張り詰め始め、そしてクレーターの中心が盛り上がり始めた。クレーターの底からは息は絶え絶えだが無傷の都塚が這い出してきた。

「はぁ……はぁ……さすがに三重障壁を抜かれたのは予想外デシタ……でも次はこちらの番デス。

レイル　ト・レイル　ヴァンデント　集え無念を残せし怨霊　汝ら身体(かたち)を持ちて　生者に災いをもたらさん　朽ちし鳥骸」

都塚の詠唱が終わると、彼の足もとが盛り上がり始めそこから全長3メートルほどの肉が腐り始めた鷲が現れた。

都塚は鷲の背中に乗り、死ぬ気の炎による幻術を4体生み出し時間差をつけながらナギ達に再び突進する。

さすがのナギ達も先ほどまでの全力攻撃による疲労が徐々に枷となっていき動きから精彩が無くなっていき、ついにナギが魔力切れになったのか地上に落下し始める。それを見た他の『紅き翼』のメンバーはナギのもとへ急ごうとするが幻術による牽制のせいでその場から動くことができなかった。

「やっと……やっと追い詰めましたヨ」

「チッ…殺(や)るならとっとと殺(や)れ」

「お断りデス。あなたには謝罪をしてもらわなければならないのデスカラ」

「いったい誰に謝罪すればいいんだ？俺はこの戦争で何百人と殺してきたんだぜ」

「一年前、あなたが吹き飛ばした遺体の山があったでショウ……あそこに建てた十字架に謝罪してクダサイ」

「ア？……馬鹿言うなテメェが死霊操作（ネクロマンス）のためにあの死体を集めたんだろ！？」

「逆デスヨ。あの時私は死霊操作をさせないためにあそこに遺体を集めたうえで消滅させるつもりだったんデスカラ」

都塚とナギはお互いが会話を重ねていくうちに致命的な生きがいがあったことに気付き始めた。

「……つーことはなんだ、俺たちは互いに勘違いをしていたってことか？けどおかしいだろ。お前が召喚した死体はなんだ？」

「ああ、あれは幻術で生み出したものデスヨ。あれなら大抵の賞金稼ぎが戦意を喪失してくれますカラネ」

「……マジでか？」

「マジデス」

こうしてナギが吹き飛ばした死者たちに謝罪をするということで都塚と『紅き翼』関係が修復されていった。

今、俺は和解したばかりの『紅き翼』と鍋をつついている。（ちなみにメインの肉は先ほどラカンが狩ってきたドラゴンの肉）

まぁお互いにこの戦争について知っていることの情報交換というわけだ。……俺はほとんど何も知らなかったわけで実際には教えてもらうだけだったんだが。

それよりも、俺の本名を名乗ってもナギはおびえるどころか「『紅き翼』に入らないか」って勧誘してきたんだが……肝っ玉がでかいのか馬鹿なのかどっちなんだろう？……たぶん両方だな。

んでもって自分が賞金首になった経緯を簡単に話してみると

村人が生贄に→それを行った奴を殺す→村人のために墓を造る→村を去る時に連合の兵に気がつかなかった→賞金首に→賞金稼ぎが襲ってくる→返り討ち→賞金が上がる→賞金稼ぎが（以下略

些細な誤解から始まった指名手配のことを『紅き翼』が聞くと全員が何か残念なものを見るようなもにょっとした表情をしていた。

「けれど、あの金色のハンマーは一体何なのですか？一撃であれほどの威力を持つものを始めて見たのですが……」

「あぁ、あれは『ゴルディオンクラッシャー』と言って私の持つ魔法の中でも最強の札で、仕組みとしては重力波を叩きつけて目標を光子に昇華させ消滅させる術式デス。
その代わり制御とかを考えると消費する魔力もバカになりませんガネ」

「はぁ、あなたもバグでしたか」

チョット待て。俺はラカンやナギほどぶっ壊れてないぞ、確実にアル達の方だ。
そのことを言うと、

「あんな術式を考える人間は世界中を探してもあなただけですよ。これをバグと言わずしてなんと言いますか。全く、少しは自重してください」

「申し訳ありませんが自重という言葉はあの魔法を作った１００年程前に捨てまシタ」

冗談で告げたら今度は詠春が頭を抱え始めた。逆にラカンとナギは大爆笑をしていたが。

詠春が頭を抱えてるけどまあ別にかまわないか

「ともかくお前がいると面白そうだから『紅き翼』に入れ！」

「その申し出は嬉しいのですが、お断りさせていただきマス。けど、協力者としてなら構いませン。これなら、万が一のことがあっても言い訳ができますカラ」

そう、先のグレート＝ブリッジ奪還作戦において俺がやったことは完全な八つ当たりで、もし『紅き翼』のメンバーだということがばれたら彼らにも迷惑をかけてしまうかもしれないから協力者という立場を俺は望んだ。

そのことに気がついたのはナギとラカンを除くメンバーだったが。

……本当に大丈夫か『紅き翼』？頭脳である三人がいなくなった時点で壊滅し……そうに無いな。力ずくでどうにかしてしまいそうだ。

「はぁ……わかったよ。けど、俺達と一緒に行動はするんだろ？」

「ええ。これまで一人旅が多かったデスカラネ。他人と旅をするのもまたいいかなと思いましテネ」

「じゃあ、とりあえず自己紹介をするか！俺はナギ・スプリングフィールド、得意な魔法は『千の雷』だ！」

「いいねぇ、俺はジャック・ラカン。お前強いんだろ？後でサシで戦ろうぜ！」

「やれやれ……私はアルビレオ・イマと言います。後であなたの人生を収集させてくれませんか？」

「ワシはゼクトという。よろしくのぅ」

「私は青山　詠春という。神鳴流剣士だ、これからよろしく頼む」

「では。私は都塚　俊彦といいます。得意な魔法は重力魔法と幻術ですのでよろしくお願いしマス」

今回俺は自身の持つ『腐敗』の特性についてはあえて『紅き翼』のメンバーに教えなかった。さすがに『本物』の奥の手まで教えてしまうと、万が一敵に回られたときにこちらの優位性が一気に無くなってしまうからだ。

まあ、こいつらが敵に回ることはほとんどないかも知れんが、保険という事で。

そして、これまでの報告をするのと補給のためにメガロメセンブリアへ向かう事になった

その１１（後書き）

『紅き翼』との会話シーンを追加しました。

オリ技

『斬艦剣　雷光一閃』…神鳴流の雷鳴剣を元に作られた技。ラカンの『斬艦剣』にナギの『千の雷』を纏わせるだけのものだが、破壊力だけを見るならネギの『巨人殺し』を遥かにしのぐ。
また回避されたとしても、纏わせた『千の雷』を開放して元の広域殲滅呪文としての効果を発揮させることもできる

感想お待ちしております

その１２（前書き）

投稿が遅くなってスイマセン！

これからは前のペースに戻せると思いたいです

その１２

Ｓｉｄｅ都塚

グレート＝ブリッジ奪還作戦から数日たち、俺たちはオスティアの法務官に呼び出されて首都に来た。
俺は、賞金首という事で法務官に会う事を拒否していたんだがナギに無理矢理連れてこられた。これに関して文句を言う事は無い。けど、普通に考えて法務官の前にまで連れてくるか？

「今日はお前達に会ってもらいたい人物がいる」

口火を切ったのは最近仲間になったガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグという男だ。
元々はメガロメセンブリアの捜査官だったが、今回の戦争に何か裏があることに気付きそれを調べるため、仲間になった。
変人ぞろいの『紅き翼』の中でも１，２を争うほどの常識人であるため俺にとってはありがたい（主に俺の胃に対して）

「法務官にか？」

「いや、ワシではない」

法務官がナギの質問に対し否定すると、俺達の左手にあったドアが

開き俺達に会ってもらいたいという人物が現れた。

「君らに会ってもらいたいのはウェスペルタティア王国王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿だ。彼女は、此度の戦争を止めるために帝国と会談を行うことになっておる。
その護衛として、世界最強と名高い『紅き翼』の君達に頼みたい」

ウェスペタルティア王国って確か１００年ほど前に世話になった国だよな……そこの王位継承者と会うなんてなんという奇縁。
まぁ、あの国との貸し借りは終わってるからさほど問題は無いけど……ラカン、さすがに姫様に殴られたのは自業自得だ。
姫さん、さすがに気易く話しかけられただけで殴るのもどうかと思うぞ？

アリカ王女との面通しも終わり、彼女のことをナギに任せ（丸投げしたともいう）街をブラブラしていたんだがその時に一冊の呪文書（スクロール）を露店で見つけた。
ただ、それだけなら無視したんだが何故か俺の第六感が警鐘を鳴らす。
『あれを持っていれば最悪の事態を避けられる。けれどその後にさらなる困難が降りかかる』と

「おっ、兄ちゃんいい目をしてるねぇ。これは……」

別に説明をしてくれるように頼んだわけではないが、俺は露店のオヤジが話しているのを聞き流し買うべき買わざるべきかを考えていた。
そして、悩み続けること１０分。
オヤジの話も佳境に入ってきたのかだんだんと口調が熱ぽっくなっており、口を挿むことが少し憚られたが、俺は意を決して話しかけた。

「でだ、これｈ「オヤジ、これいくらだ？」おお！買ってくれるのか！？この呪文書はさっき言った通り古いもんだからな普通ならかなりの高値を付けるところだったんだが、話を最後まで聞いてくれた客はあんたが初めてだ。
だから、１万で譲ってやる」

「買っタ」

俺はオヤジから値段を聞いた瞬間、躊躇わずに答えこの世界に転生した際渡されたズダ袋の中から１万ドラクマを取り出し、目の前において代わりに呪文書を拾い上げ、ズダ袋にしまい露店から去っていった。

「で、ナギと姫さんはまだ帰ってこないと」

「ああ……ったくあの馬鹿は一体何を考えてるんだ！？」

そろそろ日付が変わろうかという時間帯になっても未だ帰ってくる様子の無いナギに対して詠春が怒りを抑えきれずにテーブルを叩き割った。

別段、姫さんとナギの身の安全に関しては気にはしていない。護衛対象である姫さんが自身の身をそれなりに守れるためである。

俺が最も危惧していることは、何処かの宿で酔っぱらって一線を越してしまう事にある。もしそんな事態になってしまえば『紅き翼』が最悪、王国軍に接収されてしまう可能性も否とは言えないからである。

そして姫さんとナギは無事に帰ってきた……朝に。

だが結果としては、問題は無かった。いや問題が無かったというには語弊があるかもしれないが最悪の事態にはならなかった。

あと詠春、そんなにカリカリしていると禿げるぞ？

姫さんとナギが起こした朝帰りした日の夜、『紅き翼』が法務官にまた呼ばれた。これに関しては思い当たる節がある。
ナギが返ってきた際に「おーい。土産だ！」といって姫さんと潰した『完全なる世界』のアジトから奪ってきた証拠品についてだろう。

「お主らの証拠品は確かに本物じゃった……まさかオスティアの実質ナンバー2が敵と内通しているとは」

「ならば一刻も早く停戦を！」

「いや、個の証拠品を見て考えたのじゃ。今のまま、戦争を終結をさせてもこちらが不利なのでな、勢いの乗っている今、停戦協定を結ぶのではなくもう少し後でも構わないのではないかと思ったのでな」

「ですが！？」

「くどい！これは高度な政治的判断なのだ。そうｓ」

法務官がガトウに対し怒鳴りつけると同時にナギが無詠唱の魔法の射手を法務官に打ち込んだ。

「な……何をしているんだナギ！？」

「よく見ろ詠春。あれは偽物だ」

「ふう、いささか手荒じゃないかな『千の呪文の男』」

「な！？」

俺は目の前にいる青年を見て一時的に思考停止してしまった。何故なら、目の前にいる存在はかつて俺が初めて殺した人物だからだ。
だが、俺が固まっている間にもナギ達は白髪の青年に襲いかかろうとしたが逆に石の息吹によるカウンターをくらいその場から動けなくなった。
足止めが聞いているうちに奴は部屋に設置されていた通信機により、護衛の兵に俺達が裏切り者だという事を通達した。
俺たちは抗戦することを諦め青年の後ろの窓から眼下に広がる海へと飛び込み逃げる。

そして一夜明け、俺たちはめでたく（？）賞金首になった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3098l/

望まぬ転生をした男

2010年10月9日21時13分発行